

急増する住宅ニーズに対応するために日本住宅公団（現都市再生機構）によって開発された高島平団地。その入居は1972年から始まった。現在、団地内の総戸数は1万戸以上。14階などの高層住棟がズラリと並ぶ風景は、まさにマンモス団地の典型的な姿だ



団地再生の現場から

大学・地元連携による「東洋一の団地」再活性化の試み

高島平再生プロジェクトの展開（高島平団地）

大学の教職員・学生・住民の協働で団地に新しい風を送りこむ

かつて「東洋一のマンモス団地」と言われた高島平団地。だが、ここでも少子・高齢化や施設の老朽化等の問題が深刻化しつつある。そこで、同地域を新たに活性化し、その再生を図るために、現在、高島平再生プロジェクト、略称「高P」の活動が進められている。

このプロジェクトの中心となっているのが、高島平にキャンパスをもつ大東文化大学環境創造学部教授の山本孝則氏と、地元で印刷業を営むかたわら地域貢献会社「ここ」を運営する堀口吉四孝氏。

山本氏は、「地域に密着した大東文化大学の環境創造型人材育成の試みが、文部科学省の2007年度『現代的教育ニーズ取組支援プログラム』に選ばれたのが、一つのきっかけでした」と説明する。地域通貨「サンク」を発行し、その活用を図ることを中心に、大学・地域を融合的に活性化させる活動を展開する中から、教職員・学生と住民の協働による地域再生のプロジェクトが立ち上がったという。

サンクは、「高島平で展開する活動にボランティアで参加した学生や住民の方への対価として支払われる地域通貨」。これは、大学及び近隣の商店・施設などで利用できるが、その活用により、大学と団地を含む地域の融合や一体感の醸成が期待される。

団地の表玄関である都営地下鉄三田線の高島平駅は、日本有数の大規模団地に相応しい規模を誇る





高島平団地に約40年住んでいる長浜さんもカフェサングの常連。「ここに来ると、いろんな世代の人と話ができるのでうれしい」と語る



団地内の空き店舗を利用したカフェサングは、高島平再生プロジェクトの活動拠点。約20坪のスペースに、5つのテーブルと20席が置かれているほか、調光式照明設備、プロジェクター・スクリーン、音響機器が備えられたステージが設けられており、設備を活用した多彩な活動が展開されている

高島平再生プロジェクトでは、大東文化大学が団地の空き部屋を一括して借りて学生に貸すほか、留学生のルームシェアリングなども行われている。写真は外国語学部3回生の長島良太さんの部屋



同じ観点から、学生が高島平団地の住民になる活動も高Pの一つの柱になっている。「昨春から学内で公募し、現在は、それに応じた外国人留学生9人と日本人学生7人が団地に入居。学生は団地自治会にも加入し、お祭りや餅つき大会などにも積極的に参加しています。それに、学生は、家賃の一割程度までをサングで払うこともできるのです」と山本氏。地元の堀口氏は、「団地に学生が住むことで、空室を埋めてもらえるメリットがあるだけでなく、若い人が出入りすることで地域に新しい風が流れ込み、活気が生まれることを期待しています」と評価する。

山本氏と堀口氏に案内されて、実際に学生が住んでいる部屋を訪ねた。外国語学部3回生の長島良太さんは、「1DKの部屋ですが、一人で住むには十分な広さ。もちろん、団地の行事やプロジェクトの活動にもすすんで参加しています」と笑顔で語る。

団地内を歩いてみると、1階部分に設けられた商店街でシャッターを下ろしている店も目立つ。高Pでは、そうした状態を少しでも改善するため、昨春から商店街の空き店舗を利用して、「コミュニティ・カフェサング」をオープンさせている。ここは、地域の「コミュニティ再生の拠点。このスペースを活用して、留学生が住民を対象に外国語教室や書道教室などを開き、住民の方も写真展や絵本の読み聞かせの会を実施するなど、さまざまなことが試みられ、継続的な運営を通して地元への浸透も次第に進んでいる。

「将来的には、団地に住む学生数を100名、そして拠点となるカフェを4カ所まで増やしたい」と山本氏。地域活性化に直接つながる可能性を秘めた高Pの進展に、今後も注目していきたい。

(文責・CEL編集室)

CEL

大東文化大学環境創造学部事務室

〒175-0082 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL : 03-5399-7356
<http://www.daito.ac.jp/takap/index.html>



これからの高島平団地について語り合う山本孝則氏(左)と堀口吉四孝氏(右)。後方には団地の建物が並ぶ

朝の高島平団地。高齢者の姿が目立つが、保育園の幼児たちも団地内を散歩

